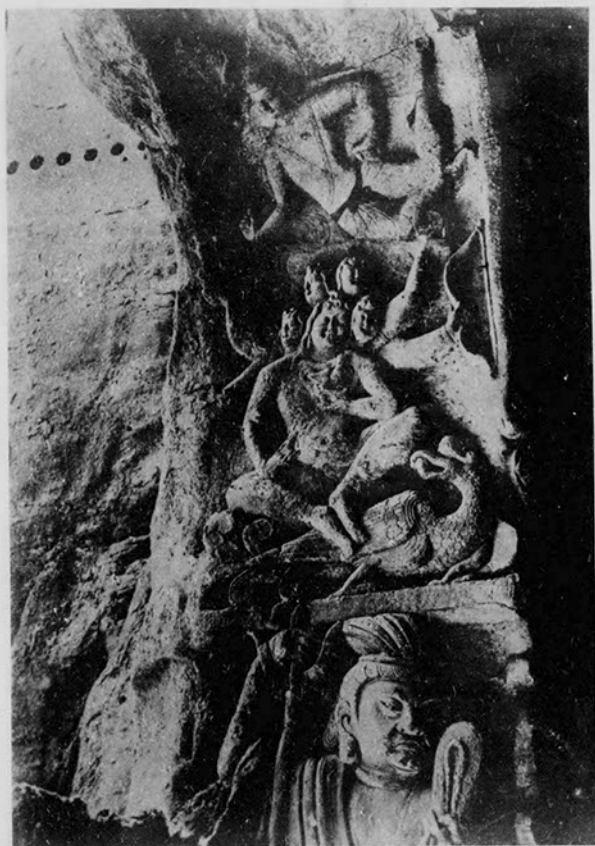


彼等自身

貳月號



大正十五年一月二十五日印刷 大正十五年二月一日發行（每月一回一日發行）





彼等自身

二月號

第二卷
第二號



彼等自身

二月號目次

雪の淺間(感想)

山村 暮鳥 一

草上學校より(感想)

宮崎 安右衛門 四

風車(詩)

小牧 暮潮 七

詩十章(詩)

山村 暮鳥 一〇

武尊山莊嚴(詩)

高橋 元吉 六

冬夜哀唱(詩)

津川 公治 九

なあはん・なりたに贈る詩(詩)

土方 定一 三

冬の實(小説)

小林 剛 二

從兄(小説)

木暮 亮 六

六號雜記

津川 公治 五

雲岡石窟について

之 山 四

編輯後記

表紙繪「雲岡中區第八窟アーチ西壁」



雪の浅間(遺稿)

山村暮鳥

自分の故里の高崎在から見ると遠く空のはてに浅間山がくつきりと立つてゐる。そしていつでも噴烟を天高くあげてゐる。關東平野の一方を除いてすつかり山々に圍まれてゐる上州ではあるが、いつもきまつて一番早く雪を見せるのは其山である。ああ、浅間がまつ白になつたな！、國の人達はそう云つて沁々冬になつた事を思ふのである。

自分も其山を見て育つたのだ。明暮に見て育つた山を思ふともう其山を見なくなつてからかなり久しくなつた事も何となく寂しく思ひ出される。

自分は信州の冬については何にも知らない。だがその雪を頂いた浅間の遠望だけは忘れる事が出来ない。

人間の顔のこと

人間の顔があそろしい勢ひで變つて行く。代一代と、否、年一年とどこまでかうしてかぎりもな

く變つて行くものだらう。これは文化とやらがすゝんだ證據だ。もういまの時代のひとびとには、あの僕達のおぢいさんおばあさんの頃の、あんな平和な、ゆつたりしたそして表裏がなくつて、生一本で、律義的な顔はみたくもみられなくなつてしまつた。

新來の外國人にその第一印象をきいてみると、誰もその婦人のスカートに似た男子の袴より、木製の下駄よりまた頭ばかりが洋風化したようにみえる、その帽子よりなにより、まづ、日本人すべてが、すゝりのようにみえるさうだ。身長が低くつて、醜い淺黒いかほには鋭い切尖のような眼が二つ、だれのまへにでゝもそれが特に狡猾そうに輝いてゐるんだ。とりわけ日本人が彼等にそうみえるのは、それだけ日本が多く人工文化のめぐみをうけすぎてゐるからだ。何といふありがたくないめぐみだらう。それはます／＼僕等が精神をなくして、幸福をなくして物質的に默的にはつてゆく階段だ。さうではあるまいか。

さてこの眼をこどもの上に落してみやう。諸君はそこにどんな子ども達を見るか。それはまつたく小い大人ではないか。その語るところ、行ふところ、どこにその天真や自然さがあるのか。子どもは無邪氣だといふ。天使のやうだといふ。ほんとにそうか。ほんとにそうあつてくれと自分は希ふ。然し實際はそうではない。悲しいことだ。

どうしてこんなになつてしまつたらう。いまの教育や制度がそうなることを學ばせ獎勵してゐる

のであると云つたら、僕をうそつきだと叱るだらうか。

僕は切にまた脈のある子どもを思ふ。その子どもを通じて將來のことを、現在には失望してゐながらも思ふ。なんといつても一に光明は子どもの上に懸つてゐ、その子どもを通じてのみかがやくものであると信ずる。

田野にでも海邊にあつても、いまはもう唄をうたつてゐるやうな人がなくなつた。のんきにもう唄もうたつてはゐられなくなつたと云ふ。稀には聴かないではないが、僕達が子どもの頃とはまつたく違ふ。よしきくにしてもそれはまあ何といふ卑俗な！それは學校のあの眼もあてられない軍歌を今様で行つたやうな唱歌をさく不快とすこしも異らない。

人間、歌へなくなつた人間はもうお終ひだと思ふより外無い。歌は生命のリズムである。生活の階調である。尊いたまひのそれは偽りなき叫びである。人間のもつてうまれた天の聲である。自然の發情である。

自分は以上の理由から、大きな意義と使命とをもつて生れる「おてんとさん」の發行を、遙に此の手をのべて祝福しやうと思ふ。

草上學校より

宮崎安右衛門

神と偕に在る事のみが余の凡てだ
神は余にさう歩む事を強く命令した。

×
觀念は一箇の生物だ

神光あれと觀念し給ひければ光さんとして宇宙を照す。

×
發言して意を通ずるは未だ天國に非ず

——在る。てふ存在其自身が凡てを如實に語り示してゐる生活でなくては天國顯現に非ず。

×
昨日の自然は今日の自然に非ず 噫！自然は斯ほど迄に安右衛門に深切に教示する。

×
模倣は死だ 何ぞ今の世に模倣の多き 模倣者は必定地獄行。

×
キリストを愛せんと欲せば彼を生かした力にふれる事。その力に觸れ得ずして何ぞ彼を愛すと言ふ可けんや。

×
オ、一筋！この一筋に生きる と古人は叫びぬ。

更に竿頭一步を進展せよ
最早や一筋すら無き世界
俺は其處に今 在る——

×
聖靈に酔ッ拂つてゐる者はシャベクル事を知らぬ 語つてゐる事を意識する者の言葉には蠅すら尻を向ける

×
現に存在する事物も嘗ては觀念されてゐたものに過ぎない。

×
見よ 茲に一個の体橋がある

彼は黙つてゐるが

その色

その香り

その光り

オ、彼の生きている事を最も勇敢に語つてゐる
こゝに神の現在を見ない眼は咀はれてゐる。

×
あゝ仕うでせう 最早や此儘すらない此儘
何といふ單純 何といふ平明
もはやあなたも私も無い

ただ在る

ただ在る

何が在るやらそれすら無い實在との合體

よい氣持

やすらかさ

雲の如く水の如く――。

諸君！自分は何人の宗教をも尊敬はするが 決してそれらの宗教に自分を從屬させうとはしない
自分は自分である 自分の道は他の何人の道でもない。
何ぞ世人の多くは他の人の道を固執して自分の道を拓かざる。

風車

暮

潮

ある街の角であつた。

黄いろの着物をきたおぢいさんが

おもちゃの風車を賣つてゐた。

そよそよ春の風が吹いて

沈丁香の香りが漂つてゐた。

廻る。廻る。ぐるぐる廻る。

赤と青の風車。

光のあや、色の渦卷……

學校がへりの足をとめられて

いつまでも見とれてゐる私だつた。

やがて生活の秋の風――

魂の葉は蝕ばみ朽ちて

すべてが褪色してゆく中に

不思議にこれだけは鮮かに

光のあや色の渦卷……

今も私の心に躍つて
廻る、廻る。ぐるぐる廻る。

一 線

何を考へても
考へつめた果ては生死の一線に觸れる。

蜘蛛の糸のやうに細いその一線。

それが風に吹かれて切れるのも自然なら
われとわが手に斷ち切るのも自然だ。

私は今も新鮮な感情でエルテルを読む。

カプリの午餐

空晴れしカプリの眞晝。

紺青の海の反射は

麗らかに岡に漲り

藤の花からみ、しだるゝ

棚の下、芝生の上に

長閑けしや、食卓並べ

水色に、とき色に

はや夏着する婦人の群に

綾を織る春の外光。

長閑けしや、ギタルラもてる

よろほひし乞食翁も

ジブシイの哀しき曲を奏でんとせず、

頬ひげを東風に吹かせて、

エスオの山に對へり。

さすらひの旅人われは

幾千里遠くへだてし

故郷を忍ぶともなし、

——何事も思ふことなし——

たゞ食後にすゝる南の國の

オレンジをうまじと思ふ

潮青きカプリの島の

行く春のうらゝ日ざしに。

詩十章 (遺稿)

山村暮鳥

ある時

それは誰のものでもない
それは萬人のものだ
それをあふぎみるもののだ
ああ、人間のくるしみを飾るもの
星、星、星……

ある時

とほく
とほく
曲りくねつてながれてゐる
純らかな一すぢの水よ
自分をとらへた
大自然のすがたよ

仙人掌をみて

これは
これは
ほんとに田舎娘の
花かんざしでもみるような
この刺々の坊主頭の
そのどこに
こんな花があつたのだらう
なんとしても
だまされてゐるようでない

ある時

雨ではない
雨ではない
すごいほど深い蒼空である
松の葉のためいきなよ

ある時

萬人を愛するといふか
むしろ
一びきの蜘蛛を憎むな

※

萬人を憎まぬことは
あるひはできよう
一びきの蜘蛛を愛することは――

ある時

憎惡のなかにも愛がある
その愛をたふとめ

あるとき

着物についた草の實が
しみく／＼と自分に
この一つのことを氣附かせた

ある時

隣寸箱のように小さな家だ
それでも窓が一つあつて
朝夕

その窓から

そこのお爺さんとお嬢さんが
ちやうど鳩か何かのように
ちよこんと二つ首を列べて
戸外をみてゐる

にっこりもしないで――

冬 近 く

海はひたひたと

鷗や千鳥をひきつれて

すつかり遠く

ひさしりぞいてしまつた

冬 近 く

冬 近 く

つつましい生活くらしいように

けれどもすこしあらつぽく

そこで小さく

さらさらと光つてゐる

あ る 時

あんまり幽かな

眞晝だから

子ども達にはすかないのだ

どこまでもどこまでも

ぶらついてゆき

そして霧のように

極き消えてしまひたい
松の細選である

あ る 時

どこかに自分を

凝視くわんしめてゐる目がある

たつた一つの

その星のような目

武尊山莊嚴

高橋元吉

永遠なるものゝ光
 流轉のこの世を截斷して過ぐるがごとき瞬間あるを我感ず
 多くの者これを見ざれども
 見る者は肅然として
 魂の深奥への返應を感じるなり

雪雪、空を蔽へる或日
 煙れるごとく揺動する塵勞の巷のかなた
 天も地もすべて光を失へるがなかに
 武尊のみひとり
 玲瓏たる白雪に光浴びるを見たりしとき
 我は思へりき
 今がこの世を截斷せる永遠なるものの光の
 うつつともあらぬかの武尊を照現せしにあらじかと。

冬枯時

ものみな明るく寂びて
 冬枯時はどうしてかううつくしいのだ
 とりわけ大かぜの過ぎて行つたあと
 こんなしづかな夕暮がきて
 落葉しつくした木々が煙るやうに
 枯れ草の上にたつてゐたり
 弾ね返るやうな空の仄明るさに
 高々とたつてゐたりしてゐると
 ほとんど泣きたくなる

自身の存在への、なんといふ深い満足
 あまつさへ
 ものやはらかな天のひかりは
 すべての存在の内側にまで遠く射し込むで
 不思議なパースペクティヴを透視させてゐるではないか。

所 思

矜るなく

また愧づるなく

生き死にの

かの野の草に似なばとおもふ

冬夜哀唱

津 川 公 治

冬の夜の

青き月の光りに散る山茶花のあり

―かそかなるその氣配よ

みつめてあれば

わが心絶えをえにして

はろばろと佗しき

ああ 散らさばや

訣れしひとの

わが胸底むねぞこの思ひ出よ

黒髪

冬の夜の
すずるなる思ひ出に
わきて色濃きは
訣れし君が黒髪にこそ

吹く風の
寂しさをめづれど
絶えなんや、戀ひにし君の
麗しき黒髪を風に吹かすな

一九二六・一九

風

相ふくまん
唇もなければ
唇に手をあしあて
われは孤り
冬の夜ふけの
風をさへけり

一九二六・一九

星々

—われに親しき二人の友あり—

星々よ

ゆきくれて
しみじみと
わが身を省るとき
まことにそなたは
なくてはならぬ友達である

一九二六・二三

冬のひる

冬のひなたの
まづかな南天のしたで
ぐつしより潤んだ野菊よ
あんまりさびしすぎるぢやないか

二一

口 笛

口笛をふくと

ああ 月がますます冴える

口笛をふかせるのは

ころのそのさびしさである

口笛にちいつとききいるのも

ころのそのさびしさである

―右二章舊稿再録

なあはん・なりたに贈る詩

土方 定一

地球に噴火口があつたのはよかつたね、なりた

噴火口に栓をされたきみはよいね、なりた

苦しいと君は言つた、なりた

爆發・僕は言つた、なりた

きみはひやした、なりた

墮落・僕は言つた、なりた

君はおこつた、わかりきつた事だ、そんな事はわかつたことだと君は言つた、なりた

なあはんの國へ行きたいときみは言ふ●なあはんの國へ時が連れて行つて呉れる、馬鹿な、な

あはん・なりたは待てない、夢がない、信ぜられない

なあはん・なりたは生きられない、死ねない、が生きてゐる

下へ、下へ、どん底へなあはん・なりたは行く、なりた

どん底に一つの叫びがある、なりた

總ての叫喚を絶した、歌はれぬ夜、もくもくの歌、あけぼの、歌、なりた

僕は待つてゐる、なりた
ほがらかに生き歌ひ出る、なあはん・なりたを

二六・二五

斷章

ちつと考へてはゐる
之と言つて考へてはゐぬ

二六・二〇

自分に爆裂だんを込めた俺だ

斷章

手垢を擦つては鼻にあて
ぬくい匂ひを舐ぶるやうに嗅ぐ――白白と汚める骨だ

二五・一六

どら猫よ

俺の額に押された墮胎児の黄ろい骨跡を俺は舐ぶる

斷章

酒に服れ上つた酔漢は揚揚

自動車●止れ

前に立ちほだかつたが真黒な暗だ

二五・一五

今朝俺は一人の懺死者を見た

冬の實

小林

剛

男はやつとの事で一つの村に辿り着いた。だが、この村でも矢張りいけなかつた。彼がこれまでに通つて來た幾つかの村々と同じ様に、こゝでも知らない他國人に、何一つの仕事も與へて呉れる人はゐなかつた。胡散臭さうにながめ廻す村人の目の中には『早く村を去れ』と云ふ鋭い光が閃いた。彼は又々他の村を探さねばならなかつた。しかし、彼にはもう今日の日に一里なり二里なりの道を歩む事は出来そうにも見えなかつた。

彼は誰も見てゐない村端れの道の傍に腰を下した。そして、懷の煙草入に手をやつた。

『畜生。煙草だつてあらあしない。』

彼は今又、繰り返へしたこの失敗を、二三日續け様に行つたのを思ひ出して、いま／＼しように體をゆすぶつた。彼はどんよりとした目の中に、苛立つた涙を無理に引つ張り出して、邊りを見廻さずにはゐられなかつた。

すべては冬だつた。何もかも枯れてゐる冬だつた。重つ苦しい雲の下には乾枯びた畑地が何處までも何處までも續いてゐるだけだつた。時間の判らない淡暗さが一面に押し迫つてゐた。男は力なげに、しかし急いで目を伏せた。絶望した邊りの様子から一瞬も早く逃れやうとする様に、そして半ば塵にまみれた赤い果實を追ふ様に。事實、彼はすぐ足元の溝の中に、一つの柿の實が轉つてゐるのを見出した。

『占めた！』

二五

彼は急いでその柿の實をひつ掴んだ。そして掌で泥を拭つた。腰の手拭で丁寧に汚れをふいた。柿の實は立派な王侯の食卓の上と同じ様に、仕事のない旅人の掌の中で美しく輝いた。充分に熟した赤味は快い柔さと共に、彼の目を通して口中一ぱいに唾液を誘つた。少し位の汚れは、もう見えなくなつた。彼は堪らない様に、がぶりと柿の實に噛りついた。

『ぶつへ！ 誰さ。』

彼は毒でも食べたかの様に、舌根をひつづる涎さをはき出した。齒で幾度も舌をこすりながら唾を吐いた。未だ拭ひ切れない泥も齒の間に感じた。彼は衝動的に柿の實を地面に投げつけた。ぐつちやりと半ば潰れて再び土に汚れた赤い實を、さも憎々しげに眺めた。

『この村もいよ／＼駄目だ。』

彼は冬の風に灰色にくすんだ村の藁屋根をながめて立ち上つた。そして動かうとしない脚で重い身体を支へながら、あてのない道を歩き出した。

何町歩いたか知らぬ。何里来たか知らぬ。開いた目が見えるのか、ぼぐつた耳が聴えるのか疑ひながら 男はとぼ／＼と歩き續けてゐた、掩ひかぶさつて来る寒さの中に、家一軒見ず、人つ子一人にも會はず、彼は唯歩いてゐた。彼も流石に寂しいと思つた。堪らなく何んでも欲しくなつた。蔭があれば頼らう、藁／＼でもあれば舐らうと思つた。だが、冷く吹く風の中には何一つ生きるもの、生きたものはなかつた。彼は感覚のなくなつた目や口の中に、人間や食物の記憶を引き出さうとあせつた。

彼は立ち止つて、空の煙草入を取り出した。そして、その残り香を嗅いで見た。皮の袋を舐めて見た。喉の中に深く押し入れてさへ見た。しかし、皮に染み込んだ汗と塵の惡味は、彼に嫌な吐氣

を催させたに過なかつた。彼は彼の持つ唯一つの惡嗅のない手拭で舌をふかねばならなかつた。

『そうだ。柿だ。』

今、彼が口元に持つて行つた、手拭に残つてゐた、泥の中のかすかな柿の香ひ。どんなに美味に、力強く彼の鼻を刺した事か。

彼は嬉しそうに元來た道をふりかへつた。そして、すべての疲れも、嫌惡も、物寂しさも忘れたかの様に、その方向に走り出した。彼の目には唯、あの路上に投げつけられた赤い實のみが、大きな光の玉の様にちらついた。彼は夢中になつて走つた。足に絡まつて来る着物の裾を、手で持ち上げ持ち上げ走りつゞけた。道傍の畑地や石ころなどは知らず後方に飛び過ぎた。

『柿だ。』

『柿だ。』

彼は息急つた喉元に喜びの叫びを囁いだ。

彼は轉がる様にして其處に突進した。

『柿。』

彼はぐつちやりと潰れた果實の前に腹這つて、それをひつ掴んだ。そして、貪る様に吞み込んだ。土のついた儘の皮も種も、蒂までも、それから、邊りに飛び散つた汁までも舐め盡した。

男が頭を上げた時、邊りには何物も見えない暗がすっかり下り切つてゐた。骨にまで染み込んで来る冷い風が吹きまくつてゐた。彼はひよいと、柿の實と云ふものが彼の一番嫌ひな果物であつた事を思ひ出した。そして、成程冬と云ふものは寒いものだと考えた。

從兄

木 暮 亮

五

翌朝私は遅く目を醒した。床の中でゆうべの事を思ひ出した。朝湯から歸つて来る時もいつになく緊張してゐた。急いで朝餉を終へて、行つてみやうと思つてゐる所に、從兄が入つて來た。

『やあ、いま朝飯か、遅いなア。』

と、彼は吸ひ残りの煙草を火鉢の灰につきさし、自分で、側にあつた茶器に茶を汲んで飲んだ。

『——ゆうべ、あれからまた色々考へてみたんだが、僕はひと先づ、町に歸つてみるつもりだ。あまり早まつても馬鹿らしいからね、……』

彼の態度はむしろ憎らしいほど落ち着いてゐた。

『ぢや、上京は見合せかな。』

『いや、見合せたと言ふんぢやない。一度町に歸つて見て、成る丈都合よく上京出来るやうにしようと思ふんだ。あれからまたいろ／＼お由にきいてみたが、伊奈川だつてさう事を起しさに思はないんだ。それにあいつまた今朝お由に逢ひに来て、今日歸るつて言つたんださうだ。……』

『もう歸るつて？ 何うしたんだらう。明後日歸るつて筈ぢやなかつたのかな。』

『で、お由も、何うしてそんなに早く歸るつて、きいてみたさうだ。したら、もつと面白い所かと思つて來てみたが、こんな所にそんなに長くゐられない、つて云ふんださうだ。僕はまた早く歸つて僕達を何うかしらうつて云ふのぢやないかと心配したんだが、お由は大丈夫だからほつてをけつて言ふんだ。——僕達がゐちや面白くないんで歸る』

『伊奈川つてまた随分變な男だね。尤も、お由さんが何んて云ひ含めたかわからないけれども……』

私は何だか得体の知れぬ苛立しさがこみあがつて來て黙つてしまつた。いまいでは、その弱々しい性格に對して少からず同情をもつてゐたのだが、いま伊奈川にすこ／＼歸つてしまはれると、待ちぼうけを喰はされた様な腹立しさを感ぜないわけにはゆかなかつた。また落ちついてゐる從兄の瞳にも反感を感じた。ずるずるとすこしでも安易な方に流れてゆかうとする彼の心持に對する反感を。——が然し、それは長く續かなかつた。私はこのエゴエツシユな苛立さが、すう／＼消えてゆくのを覺えた。自分ひとりがいさみたつてゐるのがかしくさへ思はれて來た。それで彼の數島の箱から一本とり出して、それに火をつけ。

『さうだね。こんな不景氣に、あてもなく上京したつて仕方がないね。よく考へてからにした方が穩當だらう。』

と云ふと、從兄も段々打ちとけて來て、ゆうべ床に就いてからも、何かんとお由に話しかけてゐると、彼女は疲れたと云つて熱心に耳をかさなかつた許りか、いつの間にか寢込んでしまつたので、つい腹立ちまぎれに、いさなり頭をなぐつた。すると彼女は持前のヒステリを出して、わめき乍ら彼に武者振りついて來る、お富までが目をさまして泣き出す、やがてお由は死ぬの生きるのと恐ろしい一幕を演つたのだ、と話した。

その日晝少し前に一緒に散歩に出た從兄と別れて、杉林の中を通つて道に出やうと思つて來ると、一人のレインコートを着き青年が急いで坂を下りて來た。ふと、伊奈川らしい、と思つたのでそばにあつた太い杉の幹に身体をよせてその顔を見た。眉毛の太い淺黒い彼の顔にはたしかに見覺があつた。彼はさつと沈んだ容子をして歸るに相違ないと思つてゐたのに、そんなところは一寸も見當らなかつた。いやそれどころか、彼は頗笑んでさへゐた。歩き振るもしつかりしてゐた。私は

自分の空想のひどく裏切られたのに當惑して、暫くぼんやりして見てゐると、彼は、私の前あたりまで来て突然後を振りかへつた。而して立ち止まつて麥藁帽子に手をかけたかと思ふとまた向き直つて、足を早めて角を曲つて行つてしまつた。——ふとわれにかへると私は、何んだかをよびとめてみ度い氣持がした。而して思はず後を振りむいて坂の方を見あげると、何うしたことだらう、そこには太い野生の桑の木の下に、お由とお富とが立つて此方を見てゐるではないか。私は彼女達が私を見つけてゐないらしいのを幸、また身体をかくして、それから林の中を遠廻りして宿の後庭に出て自分の部屋にかへつた。

それから四日間、従兄達は新婚者の様に暮した。而してよくお富の不機嫌を買つた。従兄は、ふくれ面をしたお富を擁抱つては、告げ口をしてやるからと云つて脅かされてゐた。よく暑い日許り續いたので、室の中で遊びあさると、私共はよく杉森の向ふの瀧臺の河原におりて行つた。瀧は二丈ほどあつて、可なり大きな瀧壺は氣味悪いほどあほく深かつた。私は前に元氣な學生達がその中で泳ぐのを見たことがあつたけれども、何うしても自分も入る氣はしなかつた。すると、泳ぎ自慢の従兄は、危ないからお由にとめられるのも耳にいれず、裸になつたかと思ふと、いきなりその中にとび込んだ。而してあきれかへつてゐる私共の方をむいて、兩手をあげて泳いでみせた。それから二三度、骨折つて、側から突き出て岩にのぼつてそこから瀧壺深くとびこんでみせた。日が蔭つて來ると、私共は石と石の間に残つてゐる流し木を集めて火を焚いた。すつきり澄んだ谷間の空氣の中に紺青の氣持よい煙が、穩かに立ちのぼつた。瀧音に負けぬ爲めに私共は高聲で話さなければならなかつた。従兄は始終快活に充奮してゐた。而してお由は此の若い騎士前には、全く完全な女王であつた。

斯うして彼等は伊奈川の事などはおびにも出さず何の屈托もなく過した。而して従兄はお由達

よりも一日早く歸る豫定であつたのに、——彼の容子から考へると、一日でも彼女から離れることが心苦しかつたのだらう——五日目の朝お由達と一緒に歸つて、お由だけはお富の女學校のある町で一泊して翌日かへることにした。所が、その五日目の朝になつて従兄は、突然私に町と一緒に立ち寄つてくれと云ひ出した。

『君と一緒に行くつてくれると、ひどく助かるんだがな。君が温泉に來てゐることは、二三人の先生も知つてゐるから。頼むよ、行つて呉れないか。』

彼等が歸つたあと、私はもう一週間もゐて、仕事の残り片づけて歸京する積りでゐた。此の四五日に、あれほど立てこんでゐた浴客も子供の學校が始まると云ふので歸り手が多く、宿も少しは静かになりかけてゐたし、續け様、遊びすぎる程遊んだせいで、私は、歸京する前に、もう一度少しの間でも良い只ひとりで落ちつきたかつた。が然し、いま斯う云はれてみると、従兄のことも考へぬわけにはいかなかつた。私が來てゐたせいで此度のことも起つたのだと考へるとこの願を斷ることも出来なかつた。

朝飯がすんでから突然私が彼等と一緒に歸ると云ひ出したので宿の人々も驚いた風であつた。私の分の勘定がなか／＼手間どつたので、母屋の廣間でお茶をよばれ乍ら待つてゐる時も、門の外まへへ送られて、別れをつけた時も、宿の人々の睡の中には私の顔をほてらす様なものが輝いてゐた。

六

私は途中で雷雨に出逢つて、雨宿りに思はぬ時を費しその日の中に従兄の宿に歸れなかつた。仕方なしにお富の女學校のある町に一泊して、次の日、お由丈は午後には歸ることにして、従兄と私と

は、その日の始業式に間に合はせやうと朝の一番の乗合自動車であつた。宿では見覺のある若女將や女中たちが去年と同じ様に私共を迎へてくれた。また従兄も平氣で、家からの歸りに山の湯に寄つて私をつれて來たことを簡単に述べ、まだ間に合ふかもしれないと云つて、その儘、急いで學校に行つた。

私は、お豊さんの案内で、去年と同じ二階の従兄の室に通された。

『うちのお由もあすこのお湯に行つてましたが……』

お豊さんは重能の火を火鉢に移し乍らさう云つた。

『え、――同じ宿だつたんですよ。』

私はお豊さんが何もかも察してゐるのか何うかわからなかつたが、何うに後になればわかることだし、また他の人と違つてほんとうの事を言つても悪くはないと考へた。

『さうで御座りましたが、それではお富なんども、何ぼかお世話さまになつたことで御座りましたよ。あの、今日から學校が始まるつて云つてをりましたが、お富は學校にかへりましたかしら。』

『え、昨日寄宿にかへりましたから、今日は學校に出てをられる筈ですよ。實は私共もゆうべでこちらへ来る筈だつたんです。所が、昨日の雷様に崇られて自動車に間に合はなかつたんですよ。』

『すると、お由も御一緒だつたのでござりますか。』

『え、お由さんは午後歸つて來られるさうです。』

『さうで御座いますか。いろ／＼お世話さまで御座りました。』

お豊さんはさう云ふとそれ以上追究もせずに階下において行つた。而して今度は若い女中が茶器を運んで來た。私はその前の夜の寢不足を補ふ爲め枕を借りて横になつた。が然し、私の神經は此

の四五日、以來極度に疲勞してゐながら却つて尖つて來て落ちついて寢れなかつた。それで仕方なしに従兄の本箱を開いて何か讀むものを探した。所が、そこには彼が學校で使つてゐるらしい參考書が四五冊と、古い講談雜誌が並んでゐるきりで、ひと頃、それがなければ夜も晝もあけぬ様に耽讀してゐた、文學書は一冊も見當らなかつた。止むを得ず私はその講談雜誌を一冊とり出してその中の落語を讀みかけた。が讀んでも身が入らず、學校へ行つた従兄のこと、午後歸つて來るお由のことが考へられてならなかつた。……

その中に私はいつか寢こんでしまつたものと見える。従兄の聲でめをさました。彼はワイシャツ一枚になつて兩手をズボンのポケットに入れたまゝ私の枕許に立つてゐた。

『何うだつたね、學校の方は。』

私は先づその方の首尾を氣にして聞いた。

『あ、生徒達はもう歸つてしまつたが、先生達は未だ残つてゐたよ。僕はいつも始業式の日なんかに來たことがないんだ、今日は珍らしいて擲擲はれた位だ。』

『そんなことは何うでも良いが、あの方は何うだつた。』

『あの方つて。』

『馬鹿に呑氣なことを云つてゐるね、伊奈川には逢はなかつたのかい。』

『あいつにか。あいつにも逢つたよ。――』

『あつて、何うだつた？』

『何とも言葉交はさなかつた。あいつはいつもさうなんだよ。何でもなさうだよ。』

私はさいてゐる中にまたいつもの彼の氣持に出逢つたなと思つた。

『ぢや、もう僕のお役目は濟んだわけだね。何事もなくすんだら此の上なしね。』

『それはわからないよ。いや、これから君の存在が必要なんだ。今夜南君も来る約束だよ。あの若い理學士さ。今夜はゆつくり飲もうぢやないか。』

その中に女中が晝飯を運んで來たので、私共は一緒に膳についたが、從兄は話柄を轉じて今度は釣の話始めた。

『何うだ、おひるから出かけてみないか。そりや面白い様につれるんだからね。』

從兄は箸を置いてから、私を連れ出さうと始めた。私は外に出る氣持にはなれなかつた。然し、ぢつと室の中におちついて彼と二人で話しこむことももう種がつきてしまつた。私はむしろその儘、歸つてしまひ度かつた。從兄の平べつたくなり切つた心と對ひ向つてゐることは苦しくなつて來た。然し私の役目がすまぬとあれば私の氣持として、その儘、歸ることは出来なかつた。

『釣なんか僕はまだやつたことがないんだ。嫌なんだね。それよりも——トランプでもやらうぢやないか。』

『トランプか、また。面白くもないよ下手のくせに。』

『さ、どつちで言ふことだか。』

私はと／＼從兄をひきづりこんだ。私は持札を力強く握つて、一生懸命彼に勝たうとした。意識しながら勝負に専心になつた。さうでもしなければ、私はぢつとしてゐられぬほど氣持がいらい／＼して來てゐた。從兄はと云ふと、いままでの元氣な話振にひきかへて、乘氣がなかつたせいも續け様負けた。うつかりして、切り札を全部集めたり、私がスベートの札を集めようとするのも氣がつかないでゐたりした。新しいレコードで負けてもあまり氣に留めてゐないらしかつた。

が、斯うして同じ勝負を三時間もつゞけてゐる中に、何うした調子が負け續けた從兄は段々あせり出した。而して却つて負けた。とその時自働車の喇叭が聞え、次いでガンリンの音が聞えたかと

思ふと、やがて宿の前に止る氣配がした。

『もう、やめやめ、……』

從兄は持札を前に投げ出して立ちあがつた。

『あや／＼現金だね。そんなに急いで行くと悪いよ。』

私が彼の顔を見あげて頬笑みながらさう云ふと、彼も一寸へそもどしたらしく、出てゆかうとした足を止めて、廊下越しに隣の庭を見やり乍ら大きな伸をした。けれども、が／＼した宿の人々の聲の中にお由の聲が聞えると、彼はそ／＼さに草履をつつかけてそ／＼階段をおりて行つた。

七

次の朝、私ガめをさましたのは從兄が學校に行つたあとであつた。にとにとした酒をのんだ次の朝の口の中のねばり氣を苦ししながら、もうすつかり朝らしい感のうすれた帳場のわきを通つて、洗面所で用を済まして來ると、お由は床をあげ、室の掃除を終へた所であつた。

『ゆうべは酔つ拂つて面倒をかけたね。』

姉様冠に手拭を冠り赤い襷をかけた彼女の甲斐甲斐しい姿は、温泉場でうけた、むくんだ様な氣持とは違つてひきしまつた感を與へた。

『よくお寝みのやうで御座いました。』

『有り難う。あんなに酔拂つたけれども、酒が良かったせいだね、今朝はさう頭に來ませんよ。——謙さんはいつの間にか學校に行つてしまつたんですね。ちつとも知らなかつた。』

『先生は、あなたをいつまでもねせてをく様に言ひましたから。』
私はそれから廊下に出て、階下の小さな流れに遊んでゐる家鴨の群を見おろし乍ら、

『よく晴れましたね、今日は二百十日とは思はれない位だ。』

『えい、ほんとに。』

お由も暫くの間彼と並んで見てゐたが、

『いま御飯を持つて参ります——おなかがおすきになつたでせう。』

と云つて階下において行つた。

『お待ち遠様で御座いました』と云つて再び彼女が私をよびかけるまで、私はぼんやり欄干によりかかり乍らまだ家鴨のお化粧を見つめてゐた。

『南さんはあれからすぐおかへりなつたんですか。』

お由が氣をきかしてあつくして来てくれた味噌汁を私はうまうまと思つた。

『えい、あまり遅くなつたので、奥様がお迎ひにいらつしやいましたので。』

『ほう、それはお氣の毒なことをしたな、——それはさうと、ゆうべは南さんに随分しつこく押搦はれたもんですねえ。』

お由は給仕盆で顔をかくす様なしなをつくつて少女の様な耻らひを見せた。

『ほんとに、わたし困つてしまつて何うしようかと思ひましたたわ。』

『しかし——これは内しよの話だけでも——あんなに楽しんで来たんだから、あれ位押搦はれたつて仕様がなないねえ。』

『まあ、ひどい。』

『だつて一人もの、僕の事も考へないで、随介見せつけたんだからね。ゆうべはよほど仇をとつてやらうかと思つたんだが、我慢して押へてゐたんですよ。』

『あや／＼、今度はあなたから……』

お由は私に何も氣のおけない容子であつた。いや、それよりも彼女らの戀の唯一人の承認者である私に何もかも打ちあけ度い素振であつた。彼女は潮つて、初めの頃の惱ましかつたこと。伊奈川が出て来てからの間に挾まれた切なさ、朋輩からうける惡罵、従兄があまり呑氣もので困ることなど、話せば幾分、波うつてゐる胸もおさまると云ふ容子であつた。

『……伊奈川さんの方では、私と一緒になれば、何うせ學校に長く勤めてゐた所で行末出世の見込みもない事だから、學校の方はやめてしまつて、商賈を始めやうつて、その準備をしてゐるらしいんです。……』と彼の女は語り續けて、私が食事を済ましてもすぐには立たうとしなかつた。私が最後で、あとおひるまで一寸暇であつたものらしかつた。

『こんなことを聞いちや怒られるかもしれないが、伊奈川君つて云ふのはお由さんの氣にいらない人ぢやないんでせう。』

斯うした唐突な露骨な質問にお由は心持たぢろいた容子であつたが、すぐまた落ちつきを取り戻したらしかつた。

『えい、それは正直なひとで悪い人ぢやありませんわ、こんなにして私共が喘してゐるのは罰がある位ですの。……』

『謙さんの事さへなかつたら、喜んでゆくつて位なんですか。』

『何うですかしら……』

『考へて見た事がない、つて云はれ／＼ばそれつきりかな、……いやこんなことを訊いちや惡かつたねえ。』

『わたしの苦い心を知らないことはないのですに、』お由は暫くうつつむいて黙つてゐたがまた續けた。『此の頃先生は毎日遊んで許りゐるんですもの、ピンポンだの、テニスだの、つて、學校から歸

つて来るのはいつも暗くなつてから許りで、し、日曜は日曜でいつも朝から釣に出かけるんですし……」

『いつ頃から始めたんですか、その釣つて云ふのは、随分熱心なんですわね、僕も危うく昨日誘ひ出される所だつたんですよ。』

『今年になつてからなんですけれど、釣れもしないのに朝は暗い中から出かけてゆくんですもの。而して、俺は釣をしてゐる時と、テニスをしてゐる時だけ何もかも忘れられるつてんですよ。わたしもつい愛想をつかして、小言を云ふと、お前ばかり苦しんでゐるんぢやない、俺だつて口にこそ出さないが何んなに苦しかしいんだ。せめて俺だけでも呑氣さうにしてゐなければ、お前だつて生きてゆく張合がないだらう、つて男つていつも勝手な理屈許り言へるもんですわねえ。それあ、先生にまで毎日暗い顔をしてゐられちや、これも困るでせうけれども。あ、呑氣にされてゐれば、いえ、先生は心から呑氣ものなんですの、遊んでゐる時は、ほんとうに何もかも忘れてしまふんですの……轉任し度い、轉任し度いつて言つて居ながら、いくら催促されてもどなたに手紙ひとつあげさちやなし、ほんとに何うしてあんなになつたのかと思ふほどの、先生はそれほど皆様から信用がなくなつたんでせうか。』

『そんなことは無いでせう。書くのが臆怖なんぢやないかな。——早く良い口があれば良いんだがねえ。』

『あてのないのを待つてゐるよりは、いつそんな學校なんかやめてしまつたら、つてよく私言ひますの、何をしたつて食つてゆく丈のことは出来るからつて云つてみても駄目なんですの。先生はよほど學校に未練があるんですわ、とても思ひ切つて辭職なんか出来やしないんですの、あとの爲めでないなんて云つて……』

『さうだ、ほんとに學校をよせば却つて元氣が出て良いと僕も思ふんですがねえ。』

『え、それほど學校に未練が残るのなら、わたしの様なものを忘れて下さい、私の爲めに學校にゐられなくなるやうなら、何日でも捨て、下さい、つても何度願つてみたくしれやしません。すると、二言目には、あれを見限つて、伊奈川の所にゆく氣かつて言ふのですからね、そしてはいつも喧嘩になつてしまふんですの。』

『謙さんは、自家にあなたの事を知らしてあるかしら。』

『いえ。言つて下さる様だと良いんですけど。でも、それはもうわたしあきらめてゐますの。何うせ私の様なもの、お氣にいらぬのはわかつてゐますから……』

言ひ終るか終らぬ中に、いまゝでの氣強い態度とは變つて、彼女の兩眼には一杯の泪が溢れて來て、聲がつまつてしまつた。やがて泪が靜かに頬を傳へて流れたが、彼女はぢつとしてそれを拭はうとしなかつた。私はその泪を見ると何と言つていゝのかわからなくなつて視線をそらしてしまつた。而して手探る様にして彼女の心持を押しはかつた。けれども、正直なところ見當がつかなくなつた。

私共が斯うして黙つて向き合つてゐると、階下からお豊さんらしい聲でお由を呼ぶのが聞えた。するとお由は始めてわれに歸つたらしく、『はい』といつもの調子で階下に答へ、それから私に向つて、

『まあ、わたしついい氣になつて、随分おしやべりしましたわねえ。——お粗末さまで御座います。』

と言つて、膳のものを直し、お盆にのせたお鉢をその上にのせてさげて行つた。

八

私はその日の午後、歸京の途についたが、歸つてみると東京はまだ暑かった。その中に間もなく學校が始まる、結婚の日が迫つて来る。で私はかなり忙はしい日を送つた。一方從兄からは、その後何の便もなかつた。約束の日が過ぎててもハガキ一枚來なかつた。目の前の忙しさで落ちついて手紙をかく丈の暇がなかつたけれども、私は、彼を思ひ出す度に不安な感じが伴つてしうがなかつた。而してよく別れる時の有様が思ひ浮んで來た。

お由は他の女中たちの間に交つて玄關に立つてゐた。從兄はワイシャツ一枚になつて、いつもの様にズボンのボジケットに兩手をいれ靴下を穿いたあしに不自由さうに下駄をつつかけて、自働車のそばまで來た。

『ぢや、きつと月末までには出て來るんだね。』

私は自働車が走り出す前にもう一度たしかめると、

『あゝ、間違はないよ、きつと、行く。』

と云つて、彼は元氣であつた。

やがて自働車が走り出すと、彼は女中達の後について帳場に入つた。お由が一番あとだつた。――

『きつと、何かいざこざが起つたのに相違ない。』

私は段々不安になつて來たので、二度簡單な手紙を出して問ひ合せた。が返事は來なかつた。

ところが、ある日、朝から出て貸家を探し歩いて、疲れて歸つて來ると、玄關の三和土に見覚えのない靴が脱いである。私の家は割合要心が良い爲め、私はいつも鍵をかけずに出てあるくので、それを知つてゐる友達に留守だといつてもあがりこんで待つてゐる。私は『誰か來てゐるな』とは思つたものの、別に氣にもせず、家に入つた。而して玄關と居間との境の唐紙をあげると、驚いたこ

とには、あれほど待ちあぐん從兄が、シャツ一枚になつて座布団を枕に寢込んでゐた。而も私が玄關の格子戸や唐紙をあけたてしても眠を醒まさぬほど、熟睡してゐる容子である。私は驚きがあさまると、斯う氣のぬけた様な、また何とも原因のわからぬあはれな氣持におそはれた。まだ十月に入つた許りで暑すぎる程なのに彼はもう冬着を着てゐる。寢込んでゐる彼の日にやけた顔の眼のあたりは、お落ち窪んで見える。鼻のわるい彼は少し口を開いて呼吸する度にくく／＼咽喉をならしてゐる。非毒く疲れてゐる様にも見える。私はひと目みた時には、やあ、と云つて呼び起さうかと思つた。が、斯うひきつけられて見てゐる中に、もつと眠らしてをき度い氣持になつた。そして、自分もさんざ歩き疲れて來た身体を、彼の側に横たへた。而していつの間にか寢こんでしまつた――

ふとめをあいて見ると、電燈の下で安生をかきながら、從兄は思案顔して煙草をふかしてゐた。

『めをさましたな。』

ねたまゝで、私がぐつとひとのびすると、彼は私を見てさう云つた。

『うむ、うっかり僕まで寢こんでしまつた。君があまりよく寢こんでゐるんで、起こすのが氣の毒になつたんだ。』

『いや、自分こそよく寢てゐたよ、僕は、蚊がうるさくつてめをさましたんだ。而して、君がくはれるといけないと思つて、線香を探してつけてやつたんだぜ。』

『それは有り難う。……で、君はいつ來たんだ。』

『ゆうべの終列車だ。一時頃訪ねて來たんだが、留守なんだらう、横になつて待つてゐる中にいかねひつてしまつたよ。』

『さうか、それは失敬したな。――何うだね、その後は？』

彼は、思ひなしか淋しげに頬笑んだまゝ、答へなかつた。

『いくら手紙を出しても返事ひとつよこさない、なんてひどいぢやないか。』

『まあ、そんなにいちめなでくれ、それでなくつてさへ、まいつてゐるんだから。……いや、だんく、話をしよう。それよりも、僕は先刻からおなが空いてたまらないんだ。外に出て何か食はうぢやないか。』

間もなく私共は近所の食ひ物やに行つた。而して従兄はそこで續け様に盃を四つ五つ乾して漸く舌の根をほぐした。

『お由の奴、伊奈川と一緒に逃げつちまひやがつたんだ。』

吐き出す様に云つた彼の言葉は、少しあつくなりかけてゐた私の頭に、どきんと來た。うるみが、つた私の眼にも、青ざめた彼の顔のこめかみのあたりが小刻みに痙攣してゐるのがうつつた。

『お由さんが伊奈川と逃げたつて?』

私は問ひかへした。そしてそのうちにいままでまともに見ることを避けてゐたものを、正面から見た様な氣がした。

『何日なんだ、それは。』

『もう一週間近くなるんだ。』

従兄は手酌でまた一杯乾した。

『四五日國に行つて來るつて出て行つたきりなんだ。そんなときは別にいつもと變つてるとも思はなかつた、いや却つて、愛想よく出て行つた位だ。それから二三日僕はあたり前の通り學校に行つてゐた。そして、お由が出發してから丁度二日目から、伊奈川が缺動し出したのだが、お由を信じてゐたから、僕は、二人の間に何か關係があるとは考へなかつたんだ。所が、二三日する内に何とな

く教員室の空氣が變なんだ、いや下宿の方が先だつたかもしれない。女中だちの僕を見る眼が變なんだ。ことにお豊さんは僕を避けてゐる容子なんだ。』

従兄はまた一盃を空にした。

『ところが昨日だ。あさ學校に行つて、三年のクラスに行つてみると、黒板に伊奈川よしつて書いてあるぢやないか。——僕は何んて間抜けだつたのだらう。教壇で僕の驚いてゐる容子を見て、隅の方でくすくす笑つてやがる。僕はとてもおちついて授業が出來なかつたよ。その時間が済むと早く下宿に歸つてしまつたんだ。而して早速お豊さんと呼んできいてみたんだ。所がお豊さんは知らない、と云つて何處までもしらをきつてゐるんだ。……』

『そりあ、勿論二人で示し合せたことに相違ないと思ふが、何處にゐるか心當りがないのかね。』

『心當がないんだ。色々考へてみたが何うもない。僕はそれから三時間許り、胸が極きむしられる様な、腹立しいやら、口惜しいやら、何とも云へない氣持で自分の室で寝轉んでゐた。誰とも顔を合せるのが嫌で、とても階下においてゆく氣がしなかつたんだ。此の頃は女將でも、女中だちでも僕に愛想をつかしてゐたんだからな。僕は、居たまらなくつて、逃げて來たんだ。』

彼はこゝまで話して來ると黙つてしまつた。何か考へ込んでゐる様子であつた。

困つたことになつたんだなア。』

私が何とも慰めの言葉を見出しかねて、さう呟くと、彼はまた思ひ出した様に語り出した。

『お由が出て行く四五日も前だつたかな、お湯に行つて來てからの僕の態度が冷くなつたつて、あいつが言ひ出して突かかゝつて來たんだ。きつと亮さんからでも入智慧されたんだらう、つて言ふんだ。そんなときだつて、何日もの喧嘩の積りだつたが、……』

『ほう、お由さんはそんな風に思つてゐたのかなア。僕には、可なり信用した口調で、君に眞面目

に轉任運動をする様に忠告してくれつて頼んでをいたのに。」

『ぢや、やはり、僕は愛想をつかされたのかな。……君に伊奈川のことを何とか云つてやしなかつたか。』

『いや別に。』

『さうかなア。』

從兄の言葉は低く力がなかつた。彼はいつの間にかよほど酔つてゐた。(終り)

六號雜記

津川公治

◆ 本號に載せた高橋元吉氏の、ことに最後の詩はまことに絶唱である。原稿を手にした時、僕はある驚愕をさへ感じた。それは閑逸、それは簡朴、それは素樸、そしてそれは何といふ高邁な禪的氣魄をもつて胸に込み込んで来るのだらう。それに小牧健夫氏の原稿も間に合はないかと思つてゐた矢先へ頂けた。これに山村暮鳥氏の詩を加へて、本號は一條觀を呈してゐる。實に愛唱すべきものばかりではないか。

◆ 今度の表紙や挿繪は期せずしてクラシカルなものばかり、しかも彫刻ばかりになつてしまつた。僕としてはむしろこの傾向を悦びたいと思ふ。だが新しいものが嫌ひなのではない。表紙はギリシャ彫刻の馬の首で、その素晴しいものであることは一見すればわか

る。挿繪の雲岡石窟の彫刻も、容易に觀ることの出来ないものであるだけに、讀者は大いに歡迎してくれるだらうと思つてゐる。次ぎ々とこれから載せて行きたいと思ふ。随分期待されることと思ふ。東洋古代にこうした驚異に價する藝術があつたことを僕は深く省みる必要がありはしないか。もう一枚はイワン・メストロウキウチの選だ。歴代の祖先がたえず蒙つてきた煩悶苦悶忍従の、そのどん底に呻吟しつつ、彼はギリシャ古典の露をふるつて、彼の神聖の獨自性の色濃いつて、ペラメントを大膽に強く打ち出してゐる、まことに彼の藝術は國民性的忍苦のシンボルであらう。この一枚を見てもそれは首肯されるであらう。

◆ 諸兄から各種の原稿を寄贈せられるが、御承知の通り雑誌が狭隘のため、當分はお願した人々の原稿だけで埋めて行くつもりであるから、その点御諒解を願ひたい。

最後に、小川茅錢氏から懇切なお手紙を頂いた。そして挿繪その他に特別の好意をもつてゐて下さることは感謝しきれない悦びである。一月號に掲げた同氏の『沼』は、コロタイブにした爲に一体の感じが思はずで、原畫のすばらしい雰囲気、失つてしまつてゐる。これをお詫びすると同時に、御原意に對して心から御禮申し上げます。

— 二九六、一、一五 —

◆ 前一月號の吹田順助氏譯『ヘルデルリン詩抄』の中「われまだ少年のころ」は最後の聯をぬかしてゐたとの譯者の追正に、次の聯を加へます。

ざわめく森の

心地よき響はわれを育てぬ、

愛することゝわれは

花の蕾中にて學びぬ。

神々の腕かみの中にぞわれは人となり

つれ。

雲岡石窟

近時支那の彫刻美術を論ずるものは、必ず多少雲岡の石窟に説き及ぼさぬものはない。雲岡石窟はまた大同石窟ともいはいはれ、昔北魏の都城であつた山西省大同府の西方約三十支里の所にある。廣き高原の帯の如く陥落して溪谷をなせる所、その北岸に高さ約百尺の斷崖を穿つて多くの石窟を造り、また大小無數の佛龕を造つて、各々佛像を彫出してある。崖壁の形勢によつて之を三區に分ち、東區には四窟、中區には九窟、西區には七窟ある。概ね北魏時代に彫鑿せられ、第十より第二十に至る五窟には、各々高さ四十尺乃至四十五尺の大石佛あり、北魏の高宗文成帝（西紀四五二—四六五）の時に成つたものである。これ等の佛像は、壁面天井等に施した裝飾文様と共に、簡勁雄渾なる北魏の藝術を味ふに足るべく、またその餘流を汲んだ我が飛鳥朝の藝術と比較して、無量の感興を覺える。（之山）

編輯後記

完全に獨りて編輯をやらうと考へてゐたが矢張り色々相談してしまつた。どうして人間と云ふものは他人を考へたがるのだらう。そのくせ結構勝手なものだが。下さる方は矢張り下さつた。何時もの事だが又少し餘つてしまつた。今更ながら頁數の少い雑誌がなさけなくなる。何事でもそらだらうが名を出さないで讀ながら色々努力や心配をして來れる人がゐると殊に雑誌などをやつてゐるとその人を尊敬したくなる。實に嬉しい。後藤兄病氣。その方面は休まねばならない。私の知つてゐる總ての友よ。私達は決して食らない事にしやう。私達が何時までも幸福と平和とを欲するならば萬端の準備は出来上つた。大正十五年一月十五日の夜（明）

四六

毎月一回一日發行
(本號定價貳拾錢)

定價表

普通號	壹部	金貳拾錢	郵稅
特別號	壹部	金五拾錢	郵稅共
半年分	特別號壹部	金壹圓四拾錢	郵稅共
壹年分	特別號貳部	金貳圓七拾錢	郵稅共

◆代金はすべて前金御拂込の事
◆郵券代用は一切謝絶す

大正十五年一月二十五日印刷納本（二月號）
大正十五年二月一日發行
水戸市下市荒神町

編輯兼 津川 公治
發行所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 柴 弘 文 社 博
水戸市上南三ノ丸

發行所 彼等自身社
「注意」廣告料拂込壹圓拾四

月刊雜誌

茨城青年

—◇二號月内容◇—

世界の最新傾向……	外務省事務官・須磨彌一
本誌一月號を祝して……	前代議士・根本 正
屠蘇危言と苦言……	水戸中學校長・塚原末吉
城南隨筆(中)……	代議士・小久保喜七
藤田東湖正氣歌通解(二)……	楓外居士
明倫歌集百首選釋(上)……	戸祭良水
戦乱中の支那視察(一)……	縣視學・向方坊英文
命は食にあり……	茨城病院長・鈴木剛次郎
猿か人かの實證……	理學博士・山内 繁雄
あのが春(俳句)……	遠藤 蘇春
病む父(短歌)……	森田麥の秋
古い手紙……	津川 公治
其他數十項……	

是を讀まねば中堅青年たる資格がない

是を讀んでゐれば文化人たるに恥ぢない

發行所 茨城青年社

水戸市上南町一六 振替東京六七七七五

一定價一ヶ月(一冊)貳拾五錢 送料壹錢一

大正十五年一月二十五日印刷
大正十五年二月一日發行
(每月一回一日發行)

定價金貳拾錢
(郵稅貳錢)